様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１７４９８

研究課題名（和文）精神障害者の地域移行・定着支援を担うピアサポーターの地域生活に関する実態調査

研究課題名（英文）The Survey on community life of peer supporters who support the regional transition and settlement of person with mental disabilities

研究代表者
舘　祥平（TACHI, SHOHEI）

千葉大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：８０７９３２９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：30~50歳代の男女計11名のピアサポーターを対象に、生活実態、健康状態、QOLについてデータ収集を実施した。GHQ-28は、身体的症状は、平均2.0点、不安と不眠は平 均2.4点、社会的活動障害は0.9点、うつ傾向は平均0.9点であった。各項目とも健康上に何等かの問題ありと認められる者はなかった。
SF-36の下位尺度の全体的健康感について、国民標準値50点との比較を行い、平均48.1点であった。聞き取り調査により、ピアサポート活動に伴う受診行動や食行動などの生活上に困難な状況はなく、ピアサポート活動実施による自己肯定感の獲得と継続するために自身で生活調整を実施している実態が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
国内のピアサポーターの研究として活動の効果、困難について見られている。ピアサポート活動による地域生活の変化を理解した上でのピアサポーターのニーズに沿った支援の在り方を検討する必要があると考える。本研究により、ピアサポーターの幅広い活動内容と様々な生活背景、ピアサポーター自身が生活調整を実施している実態が明らかとなった。今後のピアサポート活動の継続・発展の指針、ピアサポーター自身に対して、働き方・生活調整方法の指標、当事者が望むべきピアサポート活動を継続するための支援者側のサポート体制のあり方について検討できる重要な研究となった。

研究成果の概要（英文）：Research subjects are men and women aged 30 to 50. There are a total of 11 peer supporters.As the content of the research, data (Living conditions, Health status, QOL) was collected using an interview survey and two types of evaluation scales.As a result, about GHQ-28 evaluation scale, items of physical symptoms were high, but none of the items was considered to have any health problems. About the SF-36 evaluation scale, the overall health feeling of the subscale was compared with the national standard value of 50 points, and was 27.0 to 65.5 points (average 48.1). it became clear that the content of peer support differed among various types, working hours, wages, and training. Peer supporters did not feel much difficulty in life due to peer support. As a result, the peer supporters were able to obtain self-affirmation by conducting peer support and adjust their lives in order to continue their work.

研究分野：精神看護学

キーワード：精神障害　ピアサポーター　地域移行　地域定着

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本邦においては、長期入院精神障害者の地域移行・地域定着が進まない現状が見られている。新たな取り組みとして、ピアサポーターの更なる活用を掲げている。平成 27 年には、ピアサポート専門員研修機構が設立し、専門家として雇用される基盤を作るために、海外と同様に雇用ガイドラインやピアサポート専門員の養成研修を開始している。精神障害の分野において、当事者が雇用されるようになってきたのは、1990 年代であると言われており、現在では、病院、地域活動支援センター、相談支援事業所、就労継続支援・就労移行支援事業所、グループホーム、ケアホーム等さまざまな場でピアサポーターが活動している。ピアサポート活動状況として、講師活動などの普及・啓発活動、退院に向けた相談・助言、電話相談業務、院外活動への同行支援、家庭訪問等が主に見られている。海外において、精神障害者のピアサポートに関する研究がすすめられており、ピアサポート活動は、サポートする相手の感情の状態に敏感でいること、約束を履行すること、過ちを認めること、学ぶこと等を通して得られる個人としての成長、具体的な技術や能力が発展すること、コミュニケーション能力の向上が見られることを報告している。また、自信を得ること、自分自身のリカバリーや対処の方法を確実にすること、他の人びとと分かち合うことができる強みに焦点を当てること、自分自身について学ぶこと、全体的な健康を高めることが報告されている。

日本でのピアサポートに関する研究として、ピアサポート活動における効果について多く示されており、当事者独自の視点や独自の強みに「経験」により、当事者独自の視点は、専門職が構築してきた支援の枠組みや慣習、価値に対して利用者側の立場にたったケアの契機となっていることを明らかにしている。ピアサポーターの困難と工夫に関する調査、リカバリーに関する研究が見られる。しかし、ピアサポーターがどのような生活実態で地域生活を送っているかについては明らかになっていない。

２．研究の目的

ピアサポーターが地域での生活実態について聞き取り調査で収集し、評価スケールを用いて、健康状態、QOL についてデータ収集を行い、明らかにする。得られた結果より、ピアサポート活動が地域生活にどのような影響をもたらし、自身でどのように生活を調整しているのかを考察し、ピアサポート活動の今後の指針・支援者のサポート体制の示唆を得ることを目的とする。

３．研究の方法

・データ収集方法：

聞き取り調査について、IC レコーダーを用いて、年齢、性別等の情報、疾患と治療に関する情報、社会経済状況、ピアサポート活動状況、生活状況について半構成面接を実施しデータ収集する。インタビューガイドを用いて、半構成的面接を行う。調査日程は、対象者の都合に合わせて場所や時間を設定する。聞き取り時間は、1 時間程度で各対象者一回実施する。必要に応じて、対象者の承諾を得られた場合、二回実施する。聞き取り内容は、研究参加者の自由意思による同意がなされた場合のみ、IC レコーダーで録音する。

評価スケールについて、General Health Questionnaire(GHQ-28)の質問紙を用いて心身の健康状態について、MOS ShortForm 36-Item Health Survey(SF-36)の質問紙を用いて主観的 QOL を計測する。GHQ-28 は、英国の精神医学研究所によって開発され、質問紙による検査法で、身体的症状、不安と不眠、社会的活動障害、うつ傾向などが短時間で評価できるスクリーニングテストであり、国際比較研究も可能とされている。SF-36 は、米国で開発され、健康関連 QOL を測定するための科学的で信頼性・妥当性を持ち、国際的に広く使用されている。

・データ分析方法：GHQ-28、SF-36 を用いて調査した定量的データについては記述統計を用いる。聞き取り調査にて語られた内容は、NVivo 等の質的分析ソフトを用いて内容分析を行う。NVivo は、データを一か所に保管整理でき、信頼性を確保でき、国際的にも広く使用されているソフトであり、本研究でも使用する。

・対象者：ピアサポーター

・用語の定義：

ピアサポーター：「精神障害の経験を持つ人が精神障害の経験を持つ人に施す支援」とし、その活動をしている者とする。

地域生活：「食生活、活動と休息、家事、安全管理、療養、人づきあい、社会的役割について主体的に考え、取り組む行動」とする。

・本研究における対象者選定基準

20～65 歳で成人している者、自宅またはアパートにて生活している者、精神科に通院し、ピアサポーターとして半年以上活動した経験がある者とする。ピアサポート活動の種類は問わない。物質関連障害では、独自の歴史や活動形態があるため、物質関連障害のみの診断は本研究において除外する。また、本研究によって身体・精神症状の悪化のリスクが高いと通院機関・地域関連施設より判断される者は除外する。

４．研究成果

研究同意を得られた 30~50 歳代の男女計 11 名（男性 10 名、女性 1 名）のピアサポーターを対象に聞き取り調査と２種類の評価スケールを用いて、生活実態、健康状態、QOL に

ついてデータ収集を実施した。

健康状態について、GHQ-28 において、身体的症状における症状は、0~5 点（平均 2.0）、不安と不眠における症状は、１~5 点（平均 2.4 点）社会的活動障害は、0~4 点（0.9 点）、うつ傾向は、0~4 点（平均 0.9 点）であった。評価スケールにおいて、身体症状の項目が高値であったが、各項目とも健康上に何等かの問題ありと認められる者はなかった。

QOL について、SF-36 において、下位尺度の全体的健康感について、国民標準値 50 点との比較を行い、27.0 点から 65.5 点（平均 48.1）点であり、国民標準値より低値であることが明らかになった。

聞き取り調査について、食生活、活動と休息、家事、療養、人づきあいに関して、生活のしづらさに関する内容は見られなかった。食生活において、ピアサポート業務による収入の安定から食材の購入の意欲が高まること、ピアサポート業務を継続するために健康に意識した食事内容を摂取している様子が明らかになった。また、療養の場面では、服薬の飲み忘れはなく、通院についてもピサポート業務を継続するためにも、意識して取り組む様子が見られた。睡眠についてもピアサポート業務のため、日中のリズムを付けることができたと述べる結果が見られた。人づきあいについて、ピアサポート業務による医療関係者や同じピアサポーターとの交流が生まれたことが明らかになった。聞き取り調査により、職業人としての責任感が芽生えたこと、自身と充実感を得たこと、ともに頑張る仲間がいるという安心感を持てたことが明らかになった。

ピアサポーターとして働くことでの新しい環境におけるストレスへの対処、時間的拘束による症状コントロールの仕方の変化が明らかになった。ピアサポート活動によるポジティブな側面としてとらえられ、生活調整を行っているかが明らかになった。この結果は、国内にて求められているピアサポート活動の継続・発展の指針、ピアサポーター自身に対して、働き方・生活調整方法の指標、当事者が望むべきピアサポート活動を継続するための支援者側のサポート体制の示唆につながる意義が考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 舘　祥平
２．発表標題 Peer Support Research in the Psychiatric Field in Japan : Literature Review
３．学会等名 International Nursing Research Conference 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考